

**基調講演「地域 DNA から見たポストウェルネス ～食と温泉の再定義と未来への挑戦～」**

一般社団法人富士・箱根・伊豆国際学会 会長 五條堀孝氏

**PROFILE**

一般社団法人富士・箱根・伊豆国際学会 会長 五條堀孝氏

1979年、九州大学大学院理学研究科博士課程を修了。テキサス大学ヒューストン校集団遺伝学研究センター 上級研究員、助教授を経て、国立遺伝学研究所（静岡県三島市）の教授、副所長。理化学研究所 客員主幹研究員、産業技術総合研究所 生物情報解析研究センター 副センター長、文部科学省科学館、東京大学特任教授などを歴任。現在はアブドラ王立科学技術大学 特別荣誉教授、DNA 鑑定学会 理事長、静岡県マリンオープンイノベーション機構 研究所長など、多数の教育研究機関で要職を併任。

**腰部脊柱管狭窄症で歩行困難に。**

**中伊豆のおいしい食事と温泉付きの病院で回復。**

五條堀氏：

私は遺伝学者なのですが、まず最初に私の食と温泉にまつわる体験談をお話しし、私なりの食と温泉を再定義させていただき、地域 DNA と富士・箱根・伊豆国際学会についてご紹介させていただければと思います。それを踏まえ、国内外に地域の良さを発信し、多くの方に来ていただければと願っています。

2022年11月に海外出張が続いたあと、激しい腰の痛みを覚え、整形外科を訪問したところ、腰部脊柱管狭窄症（ようぶせきさちゅうかんきょうさくしょう）の診断を受けました。骨と骨の間の組織が出て神経を圧迫しており、訪れた病院でも「これまで見たことがないひどさ」と言われるほど。座っている限りは大丈夫なのですが、歩くと痛みが走り、10m 走ると立ってられない。これは間欠性跛行と言われる、腰部脊柱管狭窄症の特徴的な痛みと言われています。

東京の大学病院を紹介され、診察を受けると手術が必要とのこと。顕微鏡手術だったので、その時は手術が終わ

れば治るだろうと思っていました。実際、手術は成功、1週間くらいで退院できるとのことだったんです。でも、時間が経っても足が動かず立つこともできず、一人で動くこともできない。病院の先生も原因がわからずにいましたが、時間が経ってくるとわずかに左足が動き、希望があるかなと思っていました。

しかし、突然の発熱で手術箇所が化膿し、感染症を起こしてしまいます。幸い、薬が効き、症状は落ち着きましたが、今度は薬の副作用で強い食欲不振を起こすようになり、20kgほどの体重減になってしまいました。病院のリハビリセンターでリハビリをしていましたが、思うように体を動かすことはできず、これは介護保険や自宅の改装を考えた方がいいかなと思うほど。

やがて1日40分のリハビリの成果もあり、平行棒でなんとか立ち上がることができるくらいには回復。中伊豆にあるリハビリ専門病院に転院することに。そこは温泉病院で、温泉プールや温泉があり、中伊豆で採れた野菜などを使い、食事もおいしいと言われているところでした。

ここでは、温泉プールでリハビリをするんですが、浮力があるため倒れても大丈夫。毎日、リハビリ3時間と、自分で1時間。理学療法士の方から希望を持ちましょうと激励されながら頑張りました。

症状も徐々に改善。温泉に一人で入っても大丈夫という許可がもらえると、入院生活が一変。季節はすでに3月になっており、温泉から見える満開の桜が美しく、気分も変わりました。

その後、メキメキと状況も改善。杖で歩けるようになればと思いましたが、最終的には杖もいらなくなるくらいまで回復しました。高級旅館にいるような食事、温泉。これが温泉の素晴らしさなのかなと思った次第です。この経験をもとに、自分の中で「温泉」の再定義をやりようと思うようになりました。



### 「温泉」の再定義。温泉浴や湯治などには 今後向かうべきたくさんヒントが隠されている

五條堀氏：

温泉に関しては、温泉治療など様々な研究がなされています。その中で、温泉についていくつかに分けて再定義していきたいと思います。

1番目に「行楽・温泉浴」。行楽・レジャーとして楽しむということも大事です。

2 番目に「湯治」。これは日本人が忘れていたことで、今、海外の方が思い出させてくれています。海外の方は 1 週間～10 日ほど連泊していきませんが、日本人の場合は 1 泊 2 日が多く、3 泊 4 泊する方は少ないですね。病気などを気分から治していく。

3 番目に「リハビリ気分転換・温泉浴」。リハビリ等の気分転換による温泉浴ですね。これはツアーや観光でもあり得ると思います。

4 番目に「温泉治療」。医療や医学的検知、あるいはその温泉の成分等から科学的な形での温泉治療ですね。

このような「再定義」を行うことで、次に我々が向かうべきツアーや観光、そして温泉を利用した新しい方向性として見えてくるのではないのでしょうか。特に、「行楽・温泉浴」「湯治」「リハビリ気分転換・温泉浴」には、たくさんのヒントが隠されていると思います。

**異なる分野との出会いはイノベーションの源泉になる。**

**そのプラットフォームを提供する。**

五條堀氏：

「富士・箱根・伊豆国際学会 (FHIX)」は、設立から 4 年の一般社団法人です。この地域に散在する、国際的にも誇れる様々な観光資源、そして様々な活動する人、工場見学・音楽芸術などのような知らない人が見た時に面白いと思える活動もコンテンツとして資源になるのではと考えています。

静岡には、様々な誇らしいものがあります。素晴らしい土地があり、そこに活動する人々、優れた専門家がいます。深く追求し、そのコンテンツを皆さんに紹介していただき、そのコンテンツを知的に楽しむ。

そして、大切なことは違う分野との出会いです。そこには思いがけないイノベーションが起こり得る。プラットフォームとしてその機会を提供するのです。そこで出会ってもらって、いろいろな話をしてもらいます。そうすることで、新しい事業モデルが見えたり、新しい問題が発見されたり、新しい解決方法が出てきたりします。そういった場を提供したいというのが「富士・箱根・伊豆国際学会」のビジョンなのです。

たとえば、10 月 31 日にも「東アジア文化都市 2023 静岡県」の一環で「東アジア DNA の源流と、文化・芸術の多様な未来」を開催テーマに、川端康成、井上靖、太宰治などの文豪ゆかりの旅館の女将さんに登壇いただきました。子どもの時に文豪に実際に会った方、祖父母から聞いた話など、知らない話が多く、非常に知的な興奮を得られた場になりました。

今は AI の発達により言葉の障がいもなくなりつつあるので、このような取り組みを、インターネットを通じていずれは海外にも配信していければ。そして、今はまだ、静岡県中心ですが、いずれは山梨県や神奈川県などにも広げていければと思っています。

**「地域 DNA」とは**

**様々な地域での活動を次の世代に繋げていくこと。**

五條堀氏：

ここで DNA について補足しておきます。私たち人間は、細胞からできており、赤ちゃんから大人まで 30～60 兆の細胞があります。一つひとつの細胞の中に細胞核があり、父親から来たものと母親から来たものがあります。



日本料理というのは、素材でも食べますが、雰囲気食べる、さらに言うなら頭脳で食べるというのがあります。掛け軸があり、その俳句なり、短歌なりを楽しみ、月を愛で、その雰囲気を楽しみ、お茶や器も楽しめます。雰囲気・環境を感性で食べる。それがガストロノミー、日本食なんですね。修行に耐え、磨きに磨いて名を上げてきた料理人の方の料理を食べて味わう。

その場合、材料費が安くても10万円、20万円、場合によっては1泊100万円を出しても惜しくないという人もいると思うんです。ここに我々の持つ価値観、ガストロノミーの未来が見えてきますね。

ここで改めて「食」の再定義をしていこうと思います。

第1に「食料食」。これは、アフリカなどの食料危機対応のほか、災害や被災時の救済の対応食の問題があります。

第2に「普通食」。日常生活の中でどのように食を得るか。今はフードテックで牛や豚を殺さずにバイオ細胞を使って肉をつくろうという取り組みやアレルギーの対策もあります。

第3に「美食・ガストロノミー」。無形文化遺産に登録されている「和食」をはじめ、ガストロノミーで楽しむ地域が持つ豊かな食材など、文化としての食の大切さがあります。

第4に「その他」。これは宇宙食などですね。

## 2025年の大阪万博に向け

### 富裕層向けのサービスの展開が急務。

五條堀氏：

この地域の持つ良さを、民間主導で、観光という立場、あるいは将来的に産業に繋がるような立場でアクションを起こしていき、不足する部分を地方自治体にサポートしてもらえたらと考えています。

そこで当学会で考えたのは、2025年の大阪万博で海外から多くの人を訪れます。その際には首都圏や関西から静岡にも人の流れがあると思います。それを受け止めるだけのものを今、つくらないと間に合いません。そこで、当学会では、特別チームをつくりました。

今日はプロジェクトチームの一人、池田順一さんをお呼びし、お話いただきたいと思います。

池田氏：

私はもともと銀行員として、シティバンクの設立をするような仕事をしていましたが、東日本大震災の時、現地で1年間ボランティア活動をし、銀行を辞め、東京で「フィネクトパートナーズ」という会社を設立しました。人を助けるということを基軸においてビジネスと構築しないと、人も会社も長続きしないという考えを強く持っています。具体的には年収1億8000万円ほどの富裕層向けのサービスを提供しており、14ほどの会社が集まっています。

親戚が南足柄や箱根湯本の辺りに住んでいた関係で、沼津はよく遊びに連れてきてもらっていました。ビジネスの流れでここがどういうふうに活性化されるのだろうと話していたらめり込んでしまいました。大阪万博にも携わっていましたが、今はそちらからは手を引き、富裕層向けのおもてなしについて観光局のアドバイザーとして動いています。私の場合、マーケティングや集客を強みとしていますので、リレーションを持って、確実に人を送れるようなプロジェクトを進められればと考えています。

2030年までに6000万人のインバウンドが来ると言われおり、富裕層にも対応する必要があると言われていますが、どの都道府県でもその用意が十分ではないと考えられています。その部分に対して、我々ができることがあるはずだと、施策を考えてみました。

そこでフォーカスを当てたのが「富士・箱根・伊豆国際学会」でした。学会を支援する形で、静岡県東部をまず視野に入れ、民間の力でどうにかできたらとプロジェクトを始めています。

長期目標としては、学術・科学・研究などを集中して取り組めるような区切りがないので、将来的に伊豆に学術特区のようなものができれば、そこから新しい文化がつけられるようになります。すると、そこで学会が行われたり、研究者が移住し、みんなで議論を交わすことができます。そのような環境づくりを構想しても良いのではということで、長期目標として掲げています。

中期目標としては、ラグジュアリーツーリズムと、テーマ型ツーリズムがあります。地域 DNA の延長になりますが、テーマでもって観光や観光資源、エリアを再定義していければと考えています。たとえば日本の3大七夕祭りがありますが、海外の友人の話ではこの3つの七夕を知って始めて日本の七夕を知っていると自慢できるのだそうです。このようなインバウンドの探究心を満たすことが大切だと思います。

短期目標としては、ラグジュアリーなエリアをつくるにあたり、まずはその場をあたためることから始めます。人気がないところには人は来ません。人がたくさん来る仕組みをつくり、それに制限をかけたり、特別感を出すことでラグジュアリーなサービスをつくるのです。今は、フェスや地域のイベントにブラッシュアップする形で施策を入れ、楽しみを膨らませています。



### **富士山にまつわる長続きするような サステナブルツーリズムやテーマ型ツーリズムを検討。**

池田氏：

今、評価ロジックをつくり、長続きするようなサステナブルツーリズムやテーマ型ツーリズムを考えています。特に富士山にまつわるツアーを考えており、温泉・旅行・お祭り・メディカル・楽器・お茶・外交・学術・芸術・車・おでん・わさびといったカテゴリーで、テーマ型ツーリズムができるかと考えています。

また、インバウンドを対象に、自治体の垣根を超えて文化的な科学的なツアーが組めればいいですね。健康志向の強いインバウンド向けには、伊豆半島ロングトレイル、つまりお遍路や、メディカルツーリズムも視野に入れています。

サウジアラビア、中国、カタールなどから要請されるメディカルツーリズムの予算は1~2億ということも。それほどの規模のメニューは東京でも難しいので、プライベートジェットで移動し、人間ドックや施術を受け、プラスαの観光の部分で、静岡県でテーマ型ツーリズムを組み、1~2週間長く過ごしてもらおう。良い体験をして、日本通になっていただくというツアーを考えています。

なお、ラグジュアリーなツアーのお客さまをご案内するコンシェルジュの育成も必要です。今は様々なツールを利用できますが語学やマナー、センスなどが大切です。

**安心の面からも防災準備を事前にしておく。**

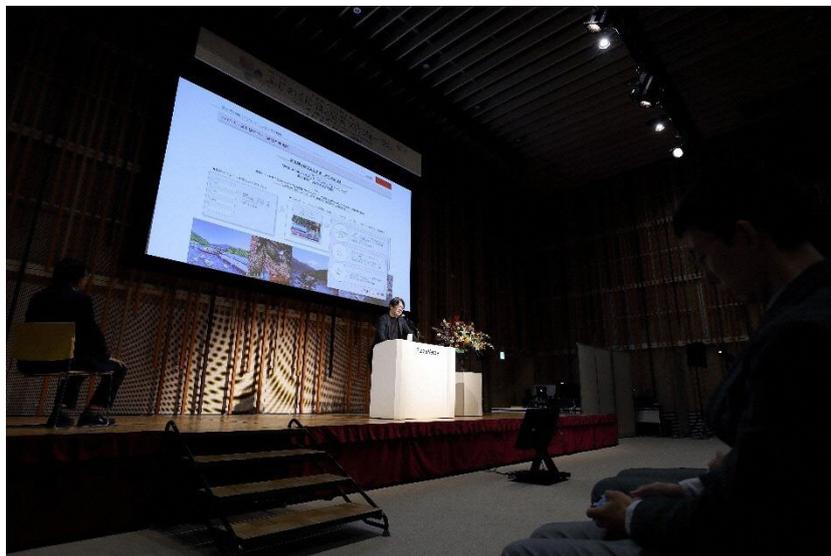
**ヘリポートの建設や防災キットの設置などを進める。**

池田氏：

東京からヘリコプターで富士山を周遊するとなると50万円ほどかかります。たとえば、三島にヘリポートを用意すれば20万円程度で周遊が可能なので、1人2、3万円程度の価格でサービスができます。ヘリは災害時に物資の輸送ができるなど、インフラにおいても役立ちます。必ず成し遂げたいと考えています。

過去に大涌谷が噴火で立ち入り制限された際、客離れが進みました。そのような災害時に対応できるよう、防災ブランドを立ち上げ、ヘルメットやゴーグルなどが入った防災キットを観光地や飲食店、企業などにおいてもらえるよう、話を進めています。また、蓄電池で携帯電話の充電ができる、ソーラーパネル付きの多機能ベンチを開発中。これにはBluetoothスピーカーも付いており、町内放送等が流れるようになっています。

これらの備えをすることで、観光客が安心して過ごせる仕組みを民間ながらに進めようと思っています。私からは以上になります。



**駿河湾の「スマートオーシャン構想」。**

**「海の見える化」でデータをどう活用するかが課題。**

五條堀氏：

最後に海のことをまとめたいと思います。

静岡県が主導で進めている「マリンオープンイノベーション（MaOI（マオイ））プロジェクト」の中に、スマー

トオーシャン構想というものがあります。駿河湾の音波、ソナー、あるいは環境 DNA の面から微生物の測定、海の物理化学的なパラメーターとしての風力や水温、さらには宇宙からのクロロフィル $\alpha$ 。微生物が持つ葉緑体が見えるので、それを狙って小魚が集まり、そして大魚が集まる。漁場を当てることができるのです。これは防災にも対応できます。

浜名湖を閉鎖的な形でのモデルケースとし、沼津の内浦もまたモデルケースとし、いずれは駿河湾全体をスマートオーシャンにしていきたいという計画です。

観測機器も進化しています。「海の見える化」を進めることができ、海洋産業だけでなく、レジャー、災害にも対応できます。将来的には、このデータを地球全体でどう交換し合うか。安全保障の問題からもルールづくりは必要になってきます。

「スマート」というのは、いかに IT、ICT、コミュニケーションを含めて、いかに合理的に次の世代に向かっていくかということですが、3年後の万博に多くの人 comes。それに向かって、用意していかなければ間に合いません。みなさんで頑張っていきたいというのが、私からのご提案です。

